

恋人はいつもご機嫌ナナメ

Natsuko & Masaomi

篠原 怜

Rei Shinobara

termity



エタニティ文庫

1

春の女神の祝福を受けた、海辺の田舎町。

満開の桜と風に揺れる緑の木々。田植えを目前にしたのどかな水田と広い畑。海沿いに広がるテニスコートからは、潮風に乗って若者たちの声と、テニスボールの弾む音が聞こえてくる。

東京駅から特急で約一時間。房総半島の九十九里平野に位置する白岬町の丘の上には、白亜のオーベルジュがたたずんでいた。

「遅い！」

朝日の差し込むフロアの隅々まで、その声は響き渡った。ピカピカに磨き上げられた大理石の床に反響し、今朝敷地内の温室で摘み取られ、ロビーに飾られた春の花々を小さく震わせた。

普段は艶やかでクールな彼の声を、耳に心地よいという女性が多い。滅多に笑わない

男だが、そこがたまらなく素敵なのだ、頬をゆるませる女性ファンもいるくらいだ。けれど、今の一喝には明らかなき立ちがこめられていて、居合わせた者たちを震え上がらせた。

「二分の遅刻だ、吉岡」

椎谷雅臣は冷ややかに言い放ち、たった今駆け込んできた部下の女性をにらんだ。早朝の『オーベルジュ・白岬』のロビーでは、レセプションや物販コーナーのスタッフが集まり、開店前の朝礼が始まるようとしている。

オーベルジュというのは、主に郊外や地方にある、宿泊施設を備えたレストランを指す。その土地の食材を使ったこだわりの料理を泊まりがけで味わうという、フランス発祥の食のスタイルだ。白岬町にあるこのオーベルジュは、四万坪の敷地の中に二つのフレンチレストランと、全室露天風呂付きの豪華な八つの客室を備えている。

「遅れて申し訳ありません……。く、車が……。車が途中でエンストして……」

息を切らせて吉岡奈津子は弁明しようとしたが、雅臣の視線を感じてすぐに声を詰まらせた。

「車がどうかしたのか」

冷たい視線、冷たい口調。言い訳なんか聞きたくねえぞと、顔に書いてある。

「いえ……。こっちのことです。遅れて申し訳ありませんでした！」

一気に言って、奈津子はがばつと頭を下げた。続けて朝礼の開始を待つ同僚たちにも、ぺこぺここと順番に頭を下げて回る。

朝からついてないなあ……

急いで朝礼の輪に加わった奈津子は、結いあげた髪のを整えながら、出勤途中に起きたアクシデントを思い返した。

このオーベルジュでレセプション業務を受け持つ奈津子は、いつもの早番の日と同じ時刻に家を出た。彼女が母親と二人で暮らす家は、ここから車で十分ほどの距離にある。けれど今日に限って、愛車が信号待ちの最中にエンストして動かなくなった。走行距離七万キロを超えた中古車だからか、半年前に買って以来、時々調子が悪くなるのだ。

ただ運よく友人の家のそばだったので、奈津子のピンチに気付いた友人が車を預かり自転車を買ってくれた。遅刻でもしようものなら、どれだけ上司である雅臣に文句を言われるか。半年前に親会社から出向して来た三十二歳のこの男は、無駄と怠惰が大嫌い。仕事に向かう姿勢はストイックで、部下にも色々と厳しい要求を突き付けるのだ。

咄嗟に雅臣の怒った顔を思い浮かべた奈津子は、借りた自転車で猛ダッシュしてきたけれど、朝礼の開始時刻に間に合わず、同僚たちが見ている前で、大魔神みたいなこわい視線でにらみ続ける上司にキツイ言葉を浴びせられた……。というわけだ。

たった一度遅刻したくらいで、なにもあんなに怒らなくなつてと、つい、口にしてし

まいたくなる。

父親が亡くなったことを機に、奈津子が生まれ育った白岬に戻ったのは去年の秋。それまでは東京で外資系のホテルに勤務していたが、ホテルの仕事を辞めてこのオーベルジュに再就職した。それが雅臣の赴任する一週間ほど前のこと。

あれから約半年が過ぎたが、その間、遅刻したのはこれが初めてだ。ホテル時代もオーベルジュに来てからも、万事において時間厳守を徹底してきた。単に今朝は運が悪かっただけ。

しかしこのイヤミ上司に、言い訳など通用するはずもない。どう説明しても、雅臣には「日頃から車のメンテくらい、きちんとやれ」と一蹴されるだろう。

だから男性スタッフの制服であるダークスーツにしゃれたネクタイ——これは彼の自前らしい——を結んで、脳みそを貫通しそうなほどの冷ややかな視線を向けてくる彼に、奈津子はひたすら低姿勢を取った。普段なら言い返すこともあるが、残念ながら今日は自分のミスだ。

「では朝礼を始めます。古川さん、今日の予定をお願いします」

雅臣に促され、古川と呼ばれた五十代の女性スタッフが、レストランや客室の予約状況と、団体客の予定などを読み上げ始めた。

古川は雅臣の母親くらいの年齢だ。だから、部下ではあっても名字に「さん付け」で

呼ばれている。他のスタッフも同様に「さん付け」で呼ばれている。けれど奈津子だけは年下だからか、常に吉岡と呼び捨てだ。

なによ、威張っちゃって。

自分だけ「さん付け」されないことが、急に悔しくなった。レセプションのスタッフは奈津子を除いて、全員が雅臣より年上だ。愛想のないカタブツ男であっても、自分より年長者には気を使わうらしい。

その代わり、唯一の「年下の部下」である二十八歳の奈津子に対してだけ、ストレス発散とばかりに横柄な態度を取る。毎日毎日、「吉岡、ロビーにゴミが落ちてい」とか「吉岡、トイレトペーパーを補充してこい」とか、細々とした雑用を言い渡すのだ。

自分でやってよ……！ とムカつくこともしばしば。いや、しょっちゅうと言っていないだろう。

雅臣に愛想がないことは、オーベルジュのスタッフには周知のことだが、奈津子への態度は少々厳し過ぎる気がした。

殊にこの数週間の彼はいつそう不機嫌というか、ご機嫌ナナメに感じられた。

「文句があるのか、吉岡」

「い、いいえ……！」

まるで頭の中を読まれたかのように、雅臣に突っ込まれる。何が気に入らなくて、こ

うも不機嫌なのかは知らないが、せめてもっとソフトに叱ってくれたら、素直になれるかもしれない。

そう、この男。口調は厳しいが、見かけは名前のとおりどこか優雅で、品のある顔立ちをしている。背がすらりと高く、男性スタッフが着ているありきたりなスーツも、彼が着るとゴージャスなタキシードのように見えてしまうから不思議だ。

その外見のせいで、同僚の女性にも、オーベルジュを訪れる女性客にも絶大な人気だった。

性格には難があるが、なまじイイ男だけに、見つめられると妙な気分にならなくもない。

待ってよ、そんなことない。絶対にありえないって！

ときばきと朝礼を進める雅臣の横顔を見つめながら、奈津子は必死で気の迷いを打ち消し続ける。

奈津子より四歳年上の彼は、いまだ独身。単に独身主義なのか、それとも縁がないのか、または彼の理想が高すぎて結婚相手が見つからないのかは知らない。けれど上司と部下として同じ業務に携わってきたこの半年間は、いびられしごかれる日々の連続だった。

仕事で成果をあげて、いつか昇進したい。そして彼と肩を並べ、やがては彼より偉くなる。それが奈津子の目下の目標だったりする。

そのためなら、多少の意地悪だって耐えてやるわよ。

雅臣の端整な横顔をちらちらと盗み見しながら、奈津子は心の中で固く誓った。

朝礼が終わり、各自が持ち場についた午前七時。オーベルジュ白岬の本館がオープンする。

それに伴い、二階にあるメイндаイニング『ラ・メール』では、朝食のサービスが始まる。ラ・メールは地元の食材を使った創作フレンチのレストランで、朝と夜の営業だ。夜は本格フレンチのディナーを堪能できるが、朝は和食を提供している。

例えば敷地内のキッチンガーデンで採れた有機野菜のサラダや和え物に、自家製味噌を使った具だくさんの味噌汁。しぼりたての野菜や果物のジュースなどもある。白岬は海辺の町だから、近隣の漁港に水揚げされたばかりの魚介を使ったメニューも豊富だ。

そして一番の人氣が、地元産の米とこだわりの卵を使った、熱々の卵かけご飯だ。これがオーベルジュの朝の名物料理。宿泊客以外にもレストランを利用できるので、毎朝本館が開く前から卵かけご飯を目当てに人が集まり始める。

「いらっしやいませ、おはようございます」

玄関入ってすぐの場所で、お客様をお迎える。奈津子が丁寧にお辞儀しながら朝の挨拶をしていると、すぐに雅臣が隣に立った。にこりとせせず、奈津子と同じように

客を迎えている。

少しは笑えないのかしら。お客様が怖がるじゃない。

つい、心の中で突っ込んでしまう。すると心持ち雅臣の口角が上がったように見えた。あら、やればできるじゃない。

今度は、心の中で思いつきり拍手する。すると、雅臣が動いたはずみで互いの腕が触れ合った。思わず身をすくめてしまう。ちらりとらんでやったが、気付かないのか、彼は涼しい顔で奈津子に寄り添いながら、出迎への挨拶を続けている。

普段から立ち位置を決めているわけではないが、何故だか雅臣が隣に来ることが多い。そういえば休憩時間が重なることもよくあった。

まるで、できそこないの部下をそばで監視してるみたいだ。そう考えたらうんざりしそうなになったが、顔見知りの年配の夫婦が近づいてきたので、笑顔で迎える。

「おはよう、なっちゃん」

「おはようございます、田中様。ごゆっくりどうぞ」

宿泊客を除けば、朝ごはんを食べに来るのはほとんどが地元の人間だ。この地で高校卒業まで過ごした奈津子に、同級生やその家族、あるいはご近所さんなどは気さくに声をかけてくれた。

一方、雅臣の前には次々と女性客が歩み寄り、朝の挨拶をしていった。

悔しいことに雅臣を目当てに訪れる女性客が、日々増加している。そのきっかけとなったのが、去年の秋のテレビ出演だ。

彼が赴任して十日も経たない頃、朝の人情情報番組でこのオーベルジュが紹介された。初めは副支配人が生放送の番組内でインタビューに応じる予定だったが、急病で休んだため、雅臣が代役を務めたのだ。

相変わらず愛想のない顔だったが、雅臣はテレビカメラの前で堂々と、オーベルジュの秋のメニューやイベントを紹介した。結果、放送が終わらぬうちから、問い合わせの電話が殺到する。

以後、テレビや旅行雑誌の取材にも何度か応じ、いつしかこのオーベルジュは「イケメンに会えるレストラン」という評判が立った。訪れた女性客の多くは雅臣を取り囲み、握手をねだったり、一緒に記念撮影をしたがった。

しかし当の雅臣は愛想笑いが苦手なのか、彼目当てに訪れる女性客に対して、いく分ひきつった顔で対応していた。今も地元の奥様方の熱烈な視線に、戸惑うような表情を浮かべている。それがおかしくて、奈津子は思わずにやりとしてしまう。すると、雅臣にじろりとにらまれた。

「今日は気温が上がりそうだから、館内の空調に気を配れ」

出迎える客が途絶えたのを見計らって、雅臣は奈津子に言った。

「わかりました」

奈津子は上着のポケットからメモを取り出し、『空調』と書きとめる。

「あと、昼の団体客はすぐ大騒ぎをするから、備品を壊されないように注意しろ」

ロビーの奥には昼食時のみ営業するレストラン『ソレイユ』がある。ここはバスツアーで訪れる団体客が利用するので、昼時のオーベルジュは、高速道路のサービスイリアムたいに賑やかになるのだ。

「わかりました」

「ソフトクリームの行列が長すぎると、他のゲストの邪魔になる。定期的に整理するようにラウンジの責任者に伝えておけ」

「了解しました。ボス」

『団体客』『行列』『ボス』と、続けて三つ書きとめていると、ロビーに戻る雅臣の足が止まり、また冷たい視線を奈津子に向ける。

「なんか言ったか？」

「い、いいえ。他には何かございますか？」

とつてつけたような愛想笑いでごまかす。雅臣はしばらく無言で奈津子を見ていたが、視線に耐えられなくなった彼女が頬をひきつらせる寸前、ようやく口を開いた。

「いや。今日も忙しくなる。てきばき動けよ」

そう言うと、彼女の返事を待たずにその場を離れた。残された奈津子は舌打ちしそうになるのを我慢して、ガラスの玄関ドアの向こうに広がる春の庭園を眺めた。

東京から遠く離れた白岬は、海と青空、さわやかな潮風とテニスコート、そしてのんびりと気さくな地元の人が多い。みんなの笑顔を見ると、雅臣の嫌味など忘れてしまふ。

ここはアウエーではない。自分のホームだ。帰って来て良かったのだと、奈津子はしみじみ思うのだった。

早番が終わった午後の三時過ぎ。奈津子は海岸通りにあるペンション『シーサイドイン・ミノノ』を訪れていた。ミノノは中学と高校の同級生だった、御園浩輔と一美夫婦が切り盛りしている小さなペンションだ。一階には小さな喫茶コーナーがあつて、奈津子はたびたび愚痴を聞いてもらいに立ち寄っていた。

「今朝は、間に合わなかったみたいね」

カウンター席でだるそうに頼杖をつく奈津子に、一美が声をかけた。今朝、困り果てた奈津子に自転車を貸し、エンストした車を御園家が経営する修理工場に運ぶ手はずを整えてくれたのは彼女だった。

「二分の遅刻だ、吉岡……ですって。遅れたのは事実だから、きちんと謝ったわ。ええ、

謝りましたとも」

雅臣の口調を真似て言う。一美が遠慮のない笑い声をあげた。

「あはは！あの顔でそんなキツイこと言うんだ、椎谷さん。見てみたいなあ」

同じ二十八歳だが、すでに三歳の女の子のママでもある一美は、仕事と子育てに忙しいはずなのに、そんな気配はみじんも感じさせない。明るいブラウンの髪にゆるふわパーマをかけて、笑うとピアスがきらりと揺れた。

「キツイし愛想ないし、ほんと嫌な奴よ。でも、もう慣れたから平気。それより今朝はごめんね、一美だって忙しいのに」

「気にしないで。お義母さんがひとみを保育所に送ってくれたから。車はもうじき浩輔が持つて来るって。それまでケーキでもどうぞ」

そう言うと、一美は奈津子が大好きな抹茶ロールケーキとコーヒーをカウンターに置いてくれた。ひとみというのは友人夫婦の一人娘で、親が共働きのため、日中は保育所に預けられている。

御國家は不動産業を筆頭に、自動車修理工場や工務店にペンションと、幅広く事業を展開している。社長を務める浩輔の父は、いわゆる地元の名士というやつで、息子夫婦の同級生ということもあり、何かと奈津子を助けてくれていた。

「御國家の皆さんにはお世話になりっぱなしで、本当に感謝しています」

お礼を言つてケーキを食べ始めながら、奈津子のため息まじりに語り出す。

「あのポンコツが調子悪くなるたび、お父さんは修理工場に持つてこいつて言つてくれるし、トイレのドアが外れたら大工さんを寄越してくれるし。一美はこうやつてケーキをゴチしてくれるし。けど今回は修理代がどれくらいになるんだか……。給料日までまだあるし、頭が痛いなあ」

精密機器メーカーの研究所員だった父が死んだのが、おととしの暮れ。母はショックで倒れ、二度ほど入院している。奈津子が東京での生活をやめて白岬に帰ってきたのは、そんな母をひとりしておけなかったからだ。

母娘二人の生活は、初めのうちこそ奈津子の給料だけでやり繰りできていたが、最近になって、古い車や築三十年を超えた自宅のメンテナンス費用がたびたび発生し、頭を悩ますこととなった。

心優しい浩輔の父は、修理代金をうんと安くしてくれたり、時にはタダにしてくれる。涙が出るほど嬉しいが、いつまでも甘えてばかりはいられないと思うようになった。

「そんなことで悩んだの？たいした修理じゃなかったみたいだし、お金なんて要らないわよ」

「だめよ。いくら同級生でも、お金のことはきっちりしておかないと」

一美の気持ちはありがたいが、はじめが必要だ。

「そう……。じゃあ、お義父ととさんに相談するといいわ。けど、相変わらずあんたは大変だねえ」

「大変だと思つと、どんどん気が滅め入るから、そう思わないことにしてるの。あたしは世帯主で母親を扶養してる。ちゃんと自立してるんだから」

「えらい！」

カウンターの向こうで、一美が大きく頷く。

「でも、早く稼かせぎのいい旦那を見つけないよ。頼りになる人をね」

「ひとりっ子っていう時点で、婚活は不利かなって、最近思ったりするんだけど」

「そんなことないって。奈津子は盆踊りのミスコンで優勝したこともあるくらい綺麗じゃない。もつと自分に自信持ったら？」

「あれは中学の時だし、そもそもたった五人しか参加しなかったミスコンなんか……。いまだに一美が口にするのは、中学三年生の夏に参加した、町内の盆踊りでのミス浴衣ゆかたコンテストのことだ。優勝者に贈られる景品欲しさに参加してみたのだが、参加者は奈津子を含めてわずか五人。あっさりと、グランプリを獲得し、まんまと景品を手にしてしまった。

「参加者が少なくて、奈津子が『ミス浴衣』に選ばれたことに変わりないよ。だから自信を持って、笑顔、笑顔。眉間にシワを寄せてちゃ、男が寄って来ないよ」

「そ、そうかな……」

無邪気だった中学時代を思い出し、つい、にへらーと笑ってしまう。その拍子に何故だか雅臣の仏頂面が思い浮かんた。

「椎谷さんさえ、もう少し優しくなってくれたら、もつと笑顔になれるんだけど」

奈津子がいまいましそうにその名を口にする、一美がぷつと噴き出した。

「また椎谷さんか。そんなに気になる？ あの人のが。確かにイイ男だもんね」
「勘違いしないで。そんな意味じゃないから。誰があんなヤツ……」

怒りに任せて、ロールケーキにぶすりとフォークを刺した。

「あいつ、子会社に向向させられたうっぶんを、あたしをいじめることで晴らしてるのよ」
「そんな子どもっぽいことしそうに見えないけどなあ」

「だめよ、あの無駄に整った顔に騙だまされちゃ」

一美が雅臣の肩を持つので、奈津子は悔しくて、つい意地になる。

「いったいどんなヘマをして、こんな田舎に飛ばされたんだか知らないけど、当たり前散らされるこっちの身にもなつてほしいわ」

「奈津子がいいつも怖い顔で椎谷さんを見てるから、あっちにも伝わるんじゃない？」

「そりゃあ、怖い顔にもなるわよ。だって、あいつが来たせいで、あたしは課長になりそびれたんだから」

あれは去年の夏、このオーベルジュの運営会社である、飯倉リゾートサービスの求人に応募した時のこと。当時の奈津子はホテルの料飲部門で営業職についていたが、その勤務経験を買われ、採用担当者から、

『是非とも当社のオーベルジュに、課長としてお迎えしたいです』

と言われたのだ。まだ三十歳にもならない自分には、破格の待遇。けれど喜んだのもつかの間、採用の直前になって、課長の件は白紙になってしまった。

『申し訳ありません、吉岡さん。急きょ親会社からオーベルジュに出向する者が決まりました……』

その人物が奈津子の代わりに課長になるのだと、当時の採用担当者が申し訳なさそうに告げたのを今でも覚えている。

親会社というのは、私鉄大手の飯倉電鉄だ。飯倉電鉄といえば、バスや鉄道の運行だけでなく不動産やレジャー産業、デパートやリゾートホテルの経営まで手掛ける大企業。そんな親会社からの出向者であれば、子会社としては受け入れざるを得ないのだろう。

結局奈津子は、ただの一般社員として採用された。月々の給与にそれほど差はなかったが、ポーナスは課長職の半分で、ホテル時代よりも若干年収が下がった。それでも実家から通えるし、正社員での採用なので、贅沢を言っている場合ではないという結論に達したのだ。

「今さら言ってもしょうがないって。あんたはあんたらしく頑張るんでしょ？」

親友に穏やかに諭され、奈津子は自分が言い過ぎたことに気付いた。

親会社から飛ばされてくるのだから、どうせ使えないリストラ要員だろうと思っただが、やって来たのはまだ若く独身のイイ男。しかも頭が切れて仕事もできる。

こんな経緯があったから、余計雅臣に反発してしまうのだ。でも、早く気持ちを切り替えなくてはと、近頃思うようになっていく。

「そうだよ。過ぎたことだし、あたしはあたしのやり方で頑張る。あれ、浩輔かな？」
外で車のドアが閉まる音がした。修理を終えた車が戻ってきたのだろう。奈津子は残りのロールケーキをひと口で頬張った。

幸い車の修理代金は、予想していたより安く上がったのでほっとした。

エンジンの調子がよくなった愛車を運転し、ミソノから五分ほどの自宅に帰ってくる。薄い青の屋根に、門の脇には大きなコニファー。膨らみ始めたつぼみがたくさんついた、つるバラのアーチと緑の芝生。

母の桃子はガーデニングに凝っているので、どれも手入れは行き届いている。

車庫に車を停めて降り立つと、奈津子は夕方の風に吹かれながら我が家を見上げた。この家は、結婚と同時に白岬に移り住んだ両親が、新居として買ったものだ。母にとっ

ては想い出の家だが、外観はすっかりくたびれ果てていた。屋根は十年以上も塗り替えをしていないので色あせているし、雨樋も何箇所か破損している。内部も建てつけの悪い箇所が増えているので、浩輔の父からはそろそろ建て替えてはどうか？ と勧められている。

リフォームという手もあるが、どっちにしても大金が必要なのだ。

雅臣のせいで課長になりそびれたが、飯倉リゾートサービスの採用担当者は奈津子に、『あなたが日々の業務に励めば、何年か後には必ず昇進できますよ。吉岡さん』

と言ってくれた。だから残業も早出もいとわない。頑張って昇進して、給料を上げてやる。

「ただいま」

「お帰りなさい！」

奈津子が靴を脱ぐより早く、エプロンをひるがえして、桃子が玄関に飛んできた。

「お腹が空いたでしょ。今日はおやつにアップルパイを焼いたの。夕飯の前に食べる？」

「ありがと、お母さん。夕飯のあとにするわ。とりあえず着替えてくるから」

まるで小学生の娘の帰宅を待ちわびていたかのような様子だ。毎日こんな感じで、朝は気持ちよく奈津子を送り出し、帰りは疲れも吹っ飛ばような笑顔で迎えてくれる。とつくに五十を過ぎたのに、まだまだ乙女みたいな雰囲気を漂わせる桃子は、ちょっと変わって

いるけれど、奈津子が頑張れる源なのだ。

ふと、桃子のエプロンが目にとまる。フリルの多い、大胆な赤い花柄のエプロン。胸元には、フランスの高級ブランドのロゴが刺繍されている。正規品なら一万円以上しそうな代物なのだが、こんなエプロンを持っていただろうか。

「素敵でしょ？ おととい、ネット通販で注文したのがもう届いたの。ポイント十倍デーだったのよ」

似合う？ とばかりに、桃子はその場でぐるりと回ってみせた。

「ポイント十倍って……お母さん！ またカードで買い物したの？」

「うん。だってすごく綺麗なんだから。いけなかった？」

「いけないに決まっているわ。無駄遣いはしないって、約束したじゃない。エプロンなんて何枚も持っているんだから。どうしてわざわざ、そんな高そうなものを……」

ガミガミ叱りそうになったが、桃子が唇を噛みしめたのに気付いて、奈津子は慌てて口をつぐむ。

「いや、あの……買っちゃったんなら仕方ないわ。でも次からは、注文する前に相談してくれるかな」

慌てて言い直したが、桃子は娘の剣幕に驚いたのか、しゅんとなったままだ。

「うん。わかったわ」

今にも泣きそうな顔で桃子は頷く。

「必要なものは買っているのよ。でも、中にはそうでないものもあるでしょ?」

「そうよね。お母さん、バカだから。……ごめんね、奈津子」

「バカだなんて言っていないわ。ただ、その、次からは気をつけてほしいな……って」

そのエプロン、よく似合っているわよとフオローしてはみたが、桃子はこくりと頷いただけで、すごすごとキッチンに戻った。どっと疲れを感じながら、奈津子は二階の自室に向かう。

またか。

ベッドの上にバッグを放り、崩れるように座り込む。桃子には毎月決まった額の生活費を現金で渡しているが、何かあった時のために奈津子のクレジットカードの家族カードを発行し、桃子に預けてある。それを使って、たまにどうしようもない買い物をしてしまう。これが桃子の困ったところ——ようするに経済観念がないのだ。

生前の父の話では、桃子は資産家の生まれで、典型的なお嬢様育ちだったらしい。一方、父は早くに両親を亡くし、奨学金で大学に通った苦学生だった。桃子の両親はそんな二人の結婚に大反対したが、それを押し切って夫婦になった。父はありのままの彼女を愛していたから、お金にはうるさく言わなかったようだ。

父の死後、わずかに残された父の預金から葬儀の支払いを済ませると、残高はゼロになった。奈津子は数ヶ月考えた末、自分が白岬に戻り、母の面倒をみようと思心したので。しかも家の建て替え資金も貯めなくてはならないから、無駄遣いは厳禁。しかし……

『お母さんに、ストレスは厳禁です』

父の死後、極度の心労で桃子が倒れると、医師は奈津子にそう告げた。となると、うちはお金に困ってるだなんて口が裂けても言えない。今度こそショックで、どうなってしまうかわからないのだ。

大丈夫。なんとかなるって。

桃子には余計な心配をかけられないが、前向きに考えなくてはと思う。

仕事、昇進、昇給、家の新築——

自分には目標がある。椎谷課長の嫌味のひとつやふたつ、どうってことない。

そう気合を入れ直し、立ち上がった奈津子は、着替えるために上着を脱いだ。髪をまとめたピンを引き抜き、長い髪を肩に下ろす。ふと、ドレッサーの鏡に映る自分と目が合った。

色白の顔に大きな目、まぶさず形の良い唇が印象的だが、残念ながら、かつて地元の盆踊りでミス浴衣ゆかたに選ばれた面影は見当たらない。化粧は必要最低限。着替えるのが面倒で、毎日家から職場の制服である紺のスーツを着たまま出勤するような、ずぼらな女になった。男が近寄りたがらないオーラをびしばし飛ばしてるわねと、一美からかわ

れたりする始末。

今は仕事と生活に追われているから、それも仕方ないとは思う。だけど恋はしたいし、彼氏も欲しい。もちろん結婚願望だつて捨ててない。

そのためには自分も変わらなきゃねと、奈津子は鏡の中の自分に向かって呟いた。

2

翌日も朝から晴れて、オーベルジュの敷地内では見事な桜並木にカメラを向ける人々を、何人も見かけた。ソメイヨシノは散り始めたが、代わりに今は八重桜が開花を迎えている。

くそ、あの女め——

椎谷雅臣は、ロビーですれ違いざま、自分にガンを飛ばしていった奈津子に腹を立てていた。上辺は礼義正しく従順だが、時折、親の敵でもあるかのように敵意むき出しの視線を向けてくる。

彼自身、奈津子にやや厳しいと思う態度で接してしまふことがあるので、それを根に持っているのかもしれない。しかし、それにしたつて度を超えている気がする。

去年の夏、雅臣は自ら願ひ出て、このオーベルジュに出向した。

あの頃は、しばらく家族から離れることしか頭になかった。だから鎌倉の実家からは遠く、若い女性のいない職場に行きたい——こんな希望を人事に出した。

ほどなくして、房総半島の白岬町にある子会社への出向を命ぜられた。広大な敷地の中に、全室露天風呂付きのラグジュアリーな客室と二つのレストラン、手入れの行き届いた庭園が自慢のオーベルジュだ。

新しい勤務地にまずまず満足したのもつかの間。アルバイトを除けばたいいてい雅臣より年上のスタッフばかりの中に、ひとりだけ二十代の、しかも美人の部下がいた。

吉岡奈津子。中途採用で、雅臣より一週間ほど早く着任した女性だ。以前は都内の外資系ホテルに勤務していたらしい。何故こんな田舎に転職したかといえは、実家が白岬なのだ、おしゃべりな女性スタッフに教えられた。父親を亡くし、体の弱い母親を抱えて働く、なかなか健気な女性だということも。

そういつた事情には感心すべき点もあったが、雅臣は奈津子が苦手だった。正確には、どう接したらいいかわからないのだ。

初めて会った日に、挑戦的な目でにらまれて驚いた。雅臣が上司になったことが気に入らないみたいだ。同時に、奈津子の女性的な魅力に心が引きつけられた。

彼女のふっくらとした唇にキスしたら、どんな味がするのだろう。髪をアップにして

いるせいで、嫌でも目にとまる細いうなじに口づけたら、彼女はどんな反応を示すのか。許されるなら後ろからそっと近づき、ほっそりとしたウエストと、女性らしい曲線を描く腰を抱き寄せたい——

気が付けばそんな願望——いや、妄想に心が支配されていた。

こんな色っぽい女性のいる職場へ出向する辞令を出した人事に、文句を言いたくなつた。今や奈津子の後ろ姿を見るだけで胸がざわつく始末だ。

彼女は部下だぞ。部下に欲情してどうする。

この半年の間、雅臣は様々な葛藤や衝動と戦ってきた。奈津子を無視することも考えたが、仕事上それは不可能だったので、わざと厳しく接した。嫌味な男だと印象づけられ、向こうも不用意に近づいてこないだろう。

狙い通りにいったものの、やがて雅臣はこの状況が苦しくなってきた。口では厳しい事を言いながら、目は絶えず彼女を追い求めていた。当分の間、女は遠ざけておく。そのつもりで白岬に来たというのに。

これから奈津子に対して、どう振る舞えばいいのか。雅臣は密かに頭を抱えていた。

敷地内の建物はレストランのある本館と、そこから回廊で繋がる宿泊棟に分かれています。宿泊棟では、のんびりと露天風呂につかったり、心行くまで朝寝坊することもでき

る。希望すれば、朝夕の食事を部屋でとることも可能だ。

一方本館には、レストランの他にカフェやギフトショップも併設している。ここでは自家製のパンやクッキー、敷地内の農園で採れた有機野菜などを販売している。この野菜は団体客にお土産として配っているのだが、口コミで美味しいと広まり、野菜を買うためだけにここを訪れる人が増えた。

「よかつたらお写真を一緒に撮っていただけませんか？」

レセプションカウンターの奥にいた雅臣に、団体客らしき中年の女性グループが声をかけてきた。先頭の女性が小型のデジカメをかざしてみせる。

「かしこまりました。少々お待ちいただけますか？」

去年の秋にテレビに出て以来、こんな依頼が毎日のように来ている。

テレビ出演の件は、もともと副支配人の牧野の**まきの**仕事だった。牧野は五十代半ばの気の弱そうな男で、持病である糖尿病のせいで欠勤が多い。あの日も体調不良で突発的に休んだため、仕方なく支配人は雅臣に代役を命じた。

ぶつつけ本番での出演だったが、無事にこなし、評判が良かったせいでそのあともいくつか取材を受けた。それがきっかけで、同じ飯倉系列である飯倉観光主催のバスツアー、他の旅行代理店との企画商品にも積極的に関わった。

女性客との写真撮影も、仕事だと割り切り可能な限り応じることにしている。

「吉岡、シャッターを頼む」

そばには他のスタッフがいたが、雅臣は迷わず奈津子にカメラマン役を言い渡した。色々と思うところはあがるが、彼女は唯一の年下の部下だし、言いつけた仕事はたいていきちんとやり遂げるので、つい重宝してしまう。

カウンターの奥で館内電話を使用していた奈津子は、ちょうど電話を置いたところだった。はいと返事して、にこやかな顔でこちらに歩いて来る。雑用を押し付けられ、内心はムカついているのだろうが、顔に出さないとこころはさすがだ。雅臣は自分でも気付かぬうちに微笑んでいた。

そうそう、これも仕事だ。割り切れよ、スイートハート。

まるで、王様とメイドね。

奈津子は見え透いた笑みを浮かべて、雅臣が差し出したカメラを受け取った。撮影場所はいつも決まっている。ロビーの中ほどにある、大きな花のディスプレイの前だ。以前は花だけを飾っていたが、雅臣と写真を撮りたがる客が増えたので、花の足もとに「飯倉リゾートサービス オーベルジュ・白岬」と書いたプレートと、日付を記したオブリエを置いてみた。すると、ここでの記念撮影がぐっと増えた。

雅臣は女性グループを並ばせて、自分は一番端に立った。奈津子はカメラを構えたが、仏頂面の雅臣を見て、ちよつとだけ意地悪してみたくなった。

「それではお撮りいたします。皆さま、笑顔でお願いいたしますね。椎谷課長、笑つてくださーい」

奈津子の言葉に雅臣ではなく、女性客たちのほうがどつと笑った。困ったような顔の雅臣がおかしくて、内心、ざまーみろと思ってしまう。すぐに雅臣は気を取り直し、奈津子のほうを見ながら女性客たちに言った。

「失礼いたしました。彼女は写真を撮ることにこだわりのあります。つい、ポーズへの注文が多くなるようです」

次は大丈夫ですと頷いてから、雅臣は奈津子にしか見えない角度でにらんでくる。

おぼえてるよと、怒りのあまり目からレーザービームを発射しそうな彼の様子に、奈津子はたじろいだ。

「で、では、皆さま。今度こそ気を取り直して、ハイ、チーズ！」

もつといじめてやりたかったが、後でどんな返しをされるかわからないのでシャッターを押しした。撮影が済んでも女性客たちはなかなか雅臣から離れなかったが、他にも記念撮影を希望するグループが現れたので、しぶしぶ離れていった。

たいした人気だと、奈津子は改めて雅臣の集客効果を思い知る。そのあと二度ほどカ

メラマンを引き受け、さすがにもう終わりにしたいと思った時だった。

「こんにちは。榎谷様」

鮮やかなレモンイエローのワンピースに、ブランド物のバッグを提げた大柄な女性が、しずしずと進み出てきた。彼女の後ろには、黒いサンングラスの男性が控えている。

「ワタクシも、お写真をお願いいたしますわ。——渡」

氣取った声でお供を呼びつけた彼女の名は、片岡モエ。奈津子より二歳下で、町外れの豪邸に住み、家事手伝いをしながら婚活に励む日々を送っている女性だ。父親はこの一帯の大地主で、実業家としても成功している。

このところ彼女は、よくオーベルジュにやって来る。そして今みたいに雅臣にすり寄って、一緒に写真を撮ってくれないかとねだるのだ。その他大勢の女性客同様、モエも雅臣のファンらしい。

「よろしければ私がお撮りいたしますが。いいですよ、課長」

「あ、ああ……」

奈津子がカメラマン役を申し出ると一瞬、雅臣が怯んだように見えた。モエは、身長百六十七センチの奈津子よりさらに背の高い、百七十五センチ。エレガントな装いとは対照的に、がっちりした肩にたくましい手足が自慢だ。雅臣はこういうガタイのいい女が苦手なのだろうか。

モエはそんなことはお構いなしに、満面の笑みを浮かべて雅臣の隣に寄り添った。あんな春らしいワンピースが欲しい——。そんな思いが奈津子の頭をチラついたが、モエは奈津子を無視して、さらにさらにデコしたスマートフォンを渡に手渡した。

渡はモエの運転手兼ボディガードで、スポーツ刈りにモミあげ、黒いサンングラスに黒いスーツと赤いネクタイという威圧感ばつちりの風貌だ。彼は意外にもうやうやしい動作でスマートフォンを受け取ると、「参ります、お嬢様」の声とともに、素早くシャッターを押した。

撮影が済むと、モエは雅臣に何度も礼を言い、奈津子のほうはちらりとも見ずに立ち去った。

「吉岡」

「なんですか？」

奈津子がモエを見送っていると、小声で雅臣に呼ばれた。

「なるべく彼女と一緒に写真を撮りたくない」

「はあ？」

意味がわからず、つい大きな声で問い返す。すると雅臣はいきなり奈津子の腕を掴んで、彼の方に引き寄せてきた。君のほうから、わざわざ向こうに声をかけたりするな」

奈津子だけに聞こえる囁き。すぐそばに雅臣の顔があつて、鳥肌が立ちそうになる。あまりの近さに、奈津子は彼の目を見ることができなかった。

「課長は選り好みなさるんですか？ モエちゃんだって、オーベルジュのお客様なのに」「一度や二度ならいい。でも最近は一日おきに来る。彼女のスマートフォンの中に、俺の写真が日々増えるのを想像してみろ」

「なにも、勝手に披露宴の写真に合成したりはしないと申しますよ？」

「くだらない冗談はいい。問題は彼女の父親が——」

「父親……片岡社長がどうかしたんですか？」

モエの父親である片岡義正は、片岡建設という会社を経営している実業家だ。それだけでなく、隣町に『落花の湯』という多彩な露天風呂が自慢の和風旅館も経営している。これがなかなかの人気で、週末はたくさん家族連れで賑わっていた。白岬では御園浩輔の父と並ぶ、地元の名士の一人に数えられている。

「もしかして、片岡社長がモエちゃんを使つてうちを偵察してると思ってるんですか？ 考え過ぎですよ。落花の湯とうちとじゃ、コンセプトもターゲットにしている客層も違います——」

「声が大きい」

もう一度、雅臣は奈津子の腕をぐいっと掴んだ。奈津子はびくりと肩を震わせ、こわ

ごわと彼を見上げる。決して痛かったわけではなく、よそ見した彼女の注意を自分に引き戻す仕草が、親密なものに感じられて驚いたのだ。

「すまない」

雅臣はすぐに奈津子の腕を離れたが、背中を押すようにしてロビーの隅に連れていき、客の視線が奈津子に向かうのを遮るように立ちはだかる。

「とにかく片岡モエに過剰なサービスは禁物だ。これは命令だ」

いつものクールな顔が目の前に迫り、すつと離れていった。

もしかしたら、片岡社長と何かトラブルっているのだろうか。そんな憶測がちらつと頭に浮かんだが、自分の心臓がばくばくと高鳴っているの、奈津子は深呼吸してそれを鎮めた。

雅臣はただ、生意気な自分を注意しただけなのだ。反抗的な部下を籠絡したいわけじゃない。でも。

彼が身につけている香りは嫌いじゃないし、耳元で囁かれて思わずうっとりしそうになった。彼の胸の位置とか肩の高さとか、くじけそうになった時にもたれかかるのにちょうどいいじゃない。

違う、そうじゃない。しっかりして、あたし——

奈津子は両手で頬を包んだ。頬が熱い。たぶん陽気のせいだ。今日は初夏並みの気温

になると天気予報が言ってたし、そのせいで頭がどうかしたのだろう。

『これは命令だ』

目を閉じると雅臣の声が蘇る。あんな取ったナルシストに自分がときめくはずがない。何度も何度も胸に言い聞かせ、仕事に戻った。

思えばあんなふうにも男性に触れられたのは久しぶりだ。ホテル時代に付き合っていた恋人と別れたのは去年の夏だが、最後のセックスはその少し前のはず。

まさか、久しぶりに男を感じた相手が苦手な上司になるとは思いもよらなかった。今日は夕方に本社とのテレビ会議が入っているから、雅臣は残業になるはずだ。彼はたいてい、早番のスタッフよりうんと早く出勤し、時には夜遅くまで残っていることもある。副支配人が休みがちなので、その仕事がそっくりそのまま雅臣にシフトしているらしい。

定時になったので、奈津子は雅臣に「お先に失礼します」と声をかけ、そそくさと退社した。今朝出がけに母の桃子が熱っぽいと言っていて、心配だったからだ。季節の変わり目で風邪をひいたのだろう。早く帰って、たまには夕飯の支度でもしよう。

と思ったのだが――

帰宅してみると、家の中はからっぽだった。玄関には鍵がかかり、キッチンのカウン

ターの上には桃子の手書きで「元気になったので買い物に行ってきます。はあとー!」のメモ。何だか拍子抜けしてしまった。しかし、一時間経っても桃子は帰ってこなかった。

五時半を過ぎて、奈津子はさすがに心配になり表に出てみた。風が冷たくなった道路を、部活帰りの中学生が数人、自転車走り去っていく。桃子の姿は見当たらない。スーパ―は歩いて十分ほどの距離だ。こんなに時間がかかるはずがない。まさか、事故に？ 捜しに行かなくては。そう思った時だ。カーブの向こうから見覚えのある黒い車が現れ、奈津子の目の前で停まった。いつもオーベルジュの従業員駐車場で見かける、雅臣の黒いドイツ車だ。たいていピカピカに磨かれているし、地元のナンバーではないから間違えようがない。

「椎谷さん……? やだ、お母さんも!」

運転席には雅臣がいて、あろうことかその隣には母の桃子が座っていた。

「その先のスーパ―の前で具合が悪そうにしゃがみこんでた。声をかけたら、君のお母さんだとわかったので送ってきたんだ」

車から降りた雅臣が、説明しながらこつちに回り込んできた。どうやら行き倒れになりかかった桃子を彼が助けて、車で送ってきてくれたらしい。そんな料な計らいのできる人間だったとは。

しかし、細身のブルージーンズの上にシルキーなうす紫のシャツを着た彼は、なんて

素敵なのだろう。甘くはないがクールすぎるわけでもないその姿に、奈津子は思わず目を奪われた。

「そうだったんですか。母は今朝から熱があつて、今日は寝てるはずだったんです。だから家にいなくて心配しています。すみません、ご迷惑をおかけして……」

「謝らなくていいよ。まさか君のお母さんとは思わなかったがな。早く寝かせてやれ、荷物は俺が運ぶから」

「はい、じゃあ……」

珍しく優しい口調。雅臣が車のドアを開けてくれたので、奈津子は桃子に手を貸して車から降ろしてやる。言われてみれば体が少し熱い。

「ごめんね、奈津子。もう大丈夫と思つて、買い物に行つただけで途中で——」

「とりあえず家に入ろう。それから聞くわ」

奈津子はだるそうに歩く桃子を支え、玄関まで付き添つて歩いた。後ろに桃子のバッグとスーパリーの買い物袋を提げた雅臣が続く。ひとまず桃子をリビングのソファに寝かせてから玄関に引き返すと、雅臣は荷物を玄関先に置いて、帰ろうとしていた。

「母がご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。でも助かりました。ありがとうございます」

奈津子は両手を膝の前で重ね、丁寧にお辞儀する。もし雅臣が通りかかつて車に乗せ

てくれなかつたら、桃子は行き倒れて、またしても病院行きになったかもしれない。それを思えば、いくらお礼を言つても足りないくらいだ。

「もういいって」

そう言うと雅臣は玄関の外に出た。奈津子もその後を追う。

「車の調子はどうだ？」

のんびりと庭を眺めるように歩きながら、雅臣は車庫にある奈津子の白い車を見て言った。

「すぐに修理に出したんですが、今のところ問題ないです」

「前から思つてたけど、何年乗つてるんだ、これ？ タイヤの山がない。そろそろ換えたほうがいいぞ」

バカにしたような言葉にカチンときたが、一応桃子を助けてくれた恩人なので、ここは大人しく答えておく。

「この車は去年、中古で買いました。新車がほしかったんですが、予算が足りなかったの。タイヤはそのうち……いえ、次のポーナスで替える予定です」

まだタイヤを交換すると決めたわけではないが、見栄だけは張つておく。雅臣は鼻で笑つたが、それ以上車について突つ込んだことは言わなかった。

「君はお母さん似なんだな」

自分の車の前まで来ると、雅臣はそんなふうに切り出した。

「はい。子どもの頃から、よく言われます」

「お父さんはいつ亡くなられたんだ？」

今度は、部下の素行を調べるための個人情報取得だろうか。でもさつきと同様、素直に答えておく。

「おとしの暮れです。釣りに行った帰りに、雨で車がスリップして」

「そうか。だから東京での仕事を辞めて、お母さんの面倒を見るために帰ってきたのか」

「え、まあ……」

雅臣はそこで言葉を切り、車のキーを手にしたまま奈津子をじっと見つめた。

「お母さんは体が弱いと聞いたけど」

「父の死が相当シヨックだったみたいで、二度ほど倒れました。不整脈が出てるって医者に言われたんです。疲労やストレスはもっての外だそうで……」

雅臣の視線が和らいだ気がした。父を亡くした哀れな母娘と思っただろう。同情されるなんて耐えられない。けれど、雅臣の答えは予想とは違った。

「髪を下ろしていると、雰囲気が違うな」

「あ……」

奈津子は肩より少し長い髪を下ろして、白いチュニックにオレンジのパンツというラ

フな服装だ。足にはミュールをつっかけている。

お互い、仕事とは違う姿を見て、似たようなことを感じていたようだ。

「おしゃべりが過ぎたな。じゃあ、俺はこれで。お母さん、お大事に」

最後はぶっきらぼうな口調に戻った雅臣は、車に乗り込むと軽く手を上げて走り去った。

一応、褒めてくれたのかな。

奈津子が家に入ると、桃子は自力で自分の部屋のベッドにもぐっていた。熱を測ると、三十八度五分もある。これでよく出歩けたものだ。呆れた目を向けると、桃子は花柄の布団をとつぷりとかぶったまま、雅臣との出会いについて話してくれた。

「スーパードから帰る途中、寒気がして動けなくなっちゃったの。ついしやがみ込んだじゃつたら目の前で車が停まって、降りてきた人が声をかけてきたの……。びっくりしたわあ」

桃子は熱で潤んだ目を輝かせた。

「その人、病院に行きますかって言ってくれたから、大丈夫ですって答えたんだけど、遠慮しないでくださいって言ってくれて。吉岡ですって名乗ったら、もしかして奈津子さんの？ って言われて」

「で、家まで送ってもらったというわけね」

「そうよ。あの人、オーベルジュで人気なんでしょ？ わかるわあ……。素敵なだけじゃ

なく優しいんだものねえ」

「みんなそう言うのよ。あいつの本性を知らないから」

「本性？」

「そ。一見好青年。その実態は、自分の容姿に酔った超ナルシストで、超イヤミつたらしくて、超横暴で傲慢な暴君よ」

「言い過ぎよ、なっちゃん」

ぷっと、母が笑った。釣られて奈津子も笑う。この様子ならひと晩休めば桃子は元気になるだろう。

これも雅臣のおかげかもしれない。

意外に親切な雅臣の一面を見せられて、奈津子の心は晴れやかになった。

翌朝奈津子が起きた時にはもう、桃子の熱は下がっていた。朝食を用意しようとする母を押しとどめ、絶対に出歩くなと言いつけて出勤した。そしてオフィスでパソコンに向かう雅臣を見つけると、改めて礼を言う。

「昨日はありがとうございました」

「もういいって。それよりお母さんの具合は？」

「熱は下がりました。大人しく寝ているように言いましたから、問題ないと思います」

「そうか。良かったな」

珍しいことに、雅臣が奈津子に向かって笑いかけてきた。ふわりと。またしても胸が、どきっとなる。

こいつ、色仕掛けであたしを懐柔する気では……と勘繰りたくなるほどだ。けれど気のせいだろうか、今朝の彼は元気がない。しきりに目頭を揉んでいる。

「寝不足ですか？ それとも何か心配ごとでも？」

パソコンでの作業を終えてオフィスを出た雅臣を追い、奈津子は並んで館内の通路を歩く。

「別に。今夜の食事を考えたら憂鬱になったんだ」

「ああ、片岡社長の招待ですね」

モエの父である片岡義正は、月に一度、地元の有力者を集めて食事を開いている。建前上は白岬の経済を活性化させるために——だそうだが、実際は義正が自分の権威をひけらかしたいだけの自己満足な宴会だという噂だ。

浩輔も父親と一緒に毎月呼ばれているし、オーベルジュからは支配人と副支配人が出席している。ただし先月は副支配人が休んだので、代わりに雅臣が出席した。

実はオーベルジュは、片岡建設所有の土地の一部を借りて、販売用の有機野菜を栽培している。敷地内の農園だけでは足りなくなってしまうからだ。そんな義理があるか

ら、無下に招待を断れないのだ。副支配人は体調に不安があることだし、今後雅臣が食事会に出る機会は、いっそう増えるだろうと奈津子は思っている。

「もしかして、モエちゃんに素っ気ないのはそれも原因なんですか？ 課長は彼女のお父さんが苦手なんでしょう」

答える代わりに雅臣が冷ややかな目を向けてきた。どうやら凶星らしい。

「あのお父さん、悪い人じゃないけど強引なところがありますから。土地を貸りてる人は、それと引き換えに無理な要求を押し付けられたりするらしいですね。課長にもそんなことが？」

「ない。もしあったとしても、君には関係ないことだ」

「そんな言い方しなくたって……。課長のほうから言い出したくせに」

つい、雅臣に食ってかかりそうになったところで支配人室のドアが開き、支配人の望月が顔を出した。普段はもっと遅い出勤なのに、こんな朝早くから来ているとは珍しい。

「椎谷、困ったことになった」

ロマングレーの髪にダンディーなスーツを着た望月は、雅臣を見るなりそう言った。

「今夜の食事会は君と牧野に頼んであったが、牧野がまた休むそうだ。私は午後から支配人の集まりがあって、泊まりで那須だから出席できない。代わりに行ってくれる人間を見つけてくれないか？」

「代わり……ですか」

雅臣は顔を曇らせた。

「土曜日はいつもより客が多いので、レストランのスタッフは無理でしょう。早番で上がるレセプションのスタッフに聞いてみますが、急ですから見つかるかどうか……」

雅臣がそう言うと、望月はふと気付いたように、奈津子に目を向けた。

「吉岡君はダメかな？ 昔から顔見知りの片岡社長のお嬢さんもおみえになるし、話し相手には不自由しないと思うが」

「私ですか？」

「彼女は無理です。お母さんが病気で、長く家を空けられないんですよ」

意外にも、雅臣がかばってくれた。モエは中学の後輩で、昔から折り合いが悪く露骨に奈津子を無視してくるが、これも仕事と思えば我慢できる。ただ、お金持ちの彼女が高そうなドレスや宝石類で着飾ってきたら、うらやましくて、よだれを垂らしてしまうかもしれない。

奈津子がそんなことを考えていると、雅臣がため息をつく。

「最悪の場合、私一人でも平気でしょう」

そう呟いた雅臣の横顔が暗く見えて、奈津子はうっかり言ってしまった。

「私で良ければ出席します」

「吉岡」

「うちの母なら大丈夫です。子どもじゃありませんから。それにただの食事会でしよう？裸踊りしろとか、怪しい余興はないですよね」

「もちろんだよ、安心してくれ。いやあ助かるよ。吉岡君」

「しかし、支配人——」

本来ならこんなイヤミ上司を助ける義理はないが、昨日桃子が世話になったし、さっきのような暗い顔をされては放っておけない。

なおも不服そうな雅臣に奈津子は言った。

「昨日、母がご迷惑をおかけしたお詫びです。私が運転しますから、課長は帰りを気にせずにお酒を飲んでください」

「勝手に段取りを決めるな。俺一人で問題ないし、自分の車で行く」

「さっき憂鬱ウツロだつて仰おかしつたくせに。片岡社長に絡まれたらしつこいですよ」

「それが余計なお世話だと、さっきも言っただろう。まったく——」

「まあまあ、君たち」

笑いを嘯み殺しながら望月が割って入る。

「彼女と一緒に行くといいよ、椎谷。きつと君の助けになるだろう」

二人の顔を交互に眺めて、望月が意味深に笑った。

3

何が助けになるだ——

雅臣はイライラしていた。その原因は主に、自分の隣で美味そうにアワビのステーキを食べている奈津子だ。彼女の向かいには同級生だという御園浩輔が座り、二人にしか通じない話題で盛り上がっている。まるで、隣にいる雅臣のことなど忘れ去っているかのように。

片岡社長主催の食事は、午後七時から隣町にある落花の湯の大広間で始まった。ざつと五十人ほどの招待客が、二列にならべた縦長のテーブルに着席している。上座には片岡社長夫妻と娘のモエが座り、乾杯のあとは片岡の長々とした挨拶挨拶が続く。多少真面目な話題も出たが、新鮮な海の幸さかと酒が運ばれると、ただの宴会になってしまった。

最終的には雅臣の運転で行くことを奈津子に承知させ、六時過ぎに彼女を自宅に迎えに行った。奈津子は薄手のピンクの花模様のワンピースの上に、ベージュのコートを羽織って待っていた。

髪をくるんとカールさせ、片方の耳元でまとめている。春の夕暮れ時の庭にたたずむ

彼女の笑顔が、雅臣の心を優しく包み込んだ。まるで駆け出しの社会人同士のカップルが、土曜の夜に映画かディナーに出かけていくシーンみたいだ。

熱が下がったという彼女の母親も玄関先に顔を見せ、笑顔で自分達を送り出してくれた。

これが自分のためのおしゃれではないことが、雅臣は残念でならなかった。借りてきた猫のようにしとやかに変貌した奈津子を車に乗せ、落花の湯に向かう間も、行く先を変更できないか本気で考えてしまったほどだ。

さらにクロークにコートを預ける段になって、もつと驚かされた。

彼女は半袖のワンピースを着ていた。胸元をV字に重ね合わせるそのデザインは、角度によっては胸の谷間が見えそうで目のやり場に困った。仕方なく下を向くと、今度はワンピースの裾からすらりと伸びた脚に目が吸い寄せられる。

どちらかというとき品の良いデザインだが、仕事の実務を重視した服との落差が激し過ぎて、雅臣は急に落ち着かなくなった。しかも席は隣同士で、ますますそわそわさせられる。他の招待客がにやにやしながら、「お似合いですなあ」などとふざけたことを言ったりしたが、そのたびに奈津子は笑みを浮かべて「御冗談を！」と否定した。

「課長、ちゃんとお料理召し上がってますか？」

「ああ」

ぶつきらほうに返事して、雅臣はグラスのノンアルコール飲料を苦々しげに飲んだ。

「ほんとに？　でもお料理がほとんど減ってませんよ。生物せいぶつはお嫌いでしたっけ？」

そう言うと彼女は、雅臣のほうに体を寄せて料理を覗のぞき込んだ。

さつきから奈津子を見ないように努力している雅臣に、奈津子は時折声をかけてきた。すんなりとした彼女の二の腕が上着の袖をかすめ、白い胸元が雅臣の胸に近づく。すると胃のあたりがもやっとし、さらにもつと下の方がぎゅぎゅつと強張こわばるのを感じた。

雅臣は歯を食いしばってその衝動に耐える。

「俺のことは気にしなくていい」

素っ気なく言ったが、頬のあたりに感じる彼女の視線は動かない。

「そんなわけにはいかないです。あたしは課長をお助けするために一緒に来たんですから」

「お助けって、何だあ？」

向かい側から御園浩輔が声をかけてきた。奈津子と同年だと聞かすが、童顔でたれ目なせいも、もつと若く見える。

「えーと、なんだったかな。とにかく支配人に言われたの。課長を助けてあげてとかなんとか」

「望月支配人はそんなこと言っていないし、俺は君の助けを必要としない」

「またすぐ、そういう可愛くないことを言っ……」

奈津子はぐっと雅臣に体を寄せて、下から覗き込むようにして彼を見上げる。彼女のまとう甘い香りが雅臣を包み、挑戦的な目が雅臣を煽る。彼の向かいでは御園不動産の社長が、こちらを見ながらくすくすと笑っていた。浩輔の父親だというこの男は、グレーのしゃれたスーツにメガネをかけた、絵に描いたような好人物だ。

雅臣は大きいため息をもらした。奈津子はすでに酔っている。まともに相手をしてはいけない。

「飲みたいんなら、好きなだけ飲めよ。帰りは心配しないでいいから。アワビが食べたんなら俺の分もやる」

ケンカする気になれず、そんなふうになると、奈津子にまじまじと見られる。

「どうしちゃったんですか？ そんなに親切だなんて課長らしくないですよ」

「悪かったな。いつもは不親切で」

二人とも大きな声だったので、周りから笑いが起こった。

「椎谷さんは、普段は優しくないのかい？」

斜め向かいに座った、緑川（ろくがわ）という男が奈津子に尋ねた。彼は御園社長と同世代の民宿経営者だ。

「ええ、それはもう！ 吉岡、アレ持ってこいだの、コレをやっとけだの、人使いが荒

いんです」

またしても笑いが起こる。いつの間にか、広間の半分くらいの人間が雅臣たちに注目していた。

「でも、仕事に対して厳しいというだけで、椎谷さんご自身は優しい方です。副支配人の体調が悪いから、その分の仕事を全部引き受けちゃやし、昨日なんて外で具合が悪くなったうちの母を、車で家まで送ってくれたんですよ」

「おい、吉岡——」

「うちに来るお客様には、椎谷さんのそういう優しさが伝わるんです。だから人気なんです。そうですねー。課長」

……完全に酔ってるな、この女。でなければ、褒め殺しのつもりか。

けれど。ほんのりと頬を染めて無邪気に語る奈津子を見ると、不思議と心が和んだ。このひと月ほど、彼の心を悩ませる問題がたくさん持ち上がったが、そんなもの忘れてしまえばいい。さうになる。

しかし和んだ気分はすぐに消えた。ビールを手にした片岡社長が、浩輔の後ろに立ったのだ。

「ここは、盛り上がってるねえ」

白髪交じりのごつい赤ら顔。メタリックな銀色のジャケットを着た片岡の後ろには、

娘のモエが立っている。片岡はビールの瓶と雅臣の顔を交互に見ながら、がらがら声で言った。

「今夜も飲まないとはカタイお人だね、椎谷さんは。それはそうと、例の返事はいつ聞かせてくれるんだい？」

周囲が途端に静まり返る。単刀直入に切り出され、雅臣はこめかみが疼くうずのを感じた。「何のお返事でしょうか」

わざと惚とろけてみたが、片岡は大げさに眉間にしわを寄せて、浩輔の肩越しに顔を突き出した。

「またまた照れちゃって、モエの婿になる件ですよ。ずっとお願いしてるじゃないですか」「婿？」

奈津子が素っ頓狂な声をあげ、目を見開いて雅臣のほうを向く。

「婿って、課長。モエちゃんと結婚するんですか？」

「バカ、誤解するな！」

つい、大声で否定してしまう。周囲の目が一斉に自分に向けられ、気まづくくなる。

発端は先月の食事会だった。初めての出席ということもあって、雅臣は片岡とその取り巻きたちに、三次会まで連れ回された。そこでしつこく家族のことを聞かれ、実家が鎌倉で、すでに結婚をした弟がいることを話した。途端に片岡が、モエの婿にならない

かと言い出したのだ。

酒の席でのたわごとだと思ったら、翌日親子でオーベルジュに現れて、支配人を交えて真剣に考えてほしいと言いつつ始末。今日奈津子の同伴を承知したのは、彼女を送るという口実があれば、早々に退散できると考え直したからだ。だが、そう上手くはいかないらしい。

「何度も申し上げましたが、そのお話はお受けすることはできません」

できるだけやんわりと断った。望月の話では、片岡はモエに婿を取らせようと何度も見合いをさせているが、すべて断られているそうだ。片岡家の財産は魅力的でも、この父と娘が相手ではたいいていの男は尻込みしてしまうのだろう。

ただオーベルジュは片岡から土地を貸っている。変に機嫌を損ねて、契約を打ち切られたら困るので、慎重に相手をしろと望月から言われていた。

「またまた、つれないことを。家は弟さんに継いでもらえばいいじゃないの。白岬が気に入ったと言ってたし、安心してうちに婿に来ますよ。そうだよなあ、モエ」

オレンジ色のスリッパドレスを着たモエが、「ええ」と父に相槌あいつちを打つ。彼女は、オーベルジュで記念写真を撮るくらいしか接点がない。そんな相手といきなり結婚できるわけがない。

「まあまあ片岡さん、そういうのは内輪の席でやりなさい。椎谷さんが困ってらっしゃ

るよ」

「御園さんは、黙っててよ。俺はね、椎谷さんに聞いてるんだよ。——椎谷さん、うちのモエじゃ不満かね。ちょっとデカいけど、いいコだぞ」

御園社長の取り成しを、片岡はぼつさり切り捨てる。仕方がないので、雅臣はもう一度丁寧にかつはつきりと伝えた。

「僕のような若輩には、身に余るお話です。しかし、お受けすることはできません」
その言葉に片岡は、急にふてくされたブルドッグのような顔に変わる。

「理由はなんなの？ モエが気に入らないっての？」

「そういうわけでは」

「うちの婿になったら、一生食いぶちの心配はないんだよ？」

「と、仰おしやられましても……」

「じゃあ、なによ。何が不満なの。まさか決まった相手がいるってのかい？」

決まった相手。

雅臣は吸い寄せられるように、隣の奈津子を見た。彼女はこの状況についていけないのか、ぼかんと口をあけたまま雅臣を見ていた。つややかな彼女の唇が彼の視線を釘づけにする。

その瞬間、雅臣の中で何かが弾け、ある決心が固まった。

「はい。実は今まで隠していましたが、僕には結婚を約束した女性がおります」

おとお！ つと場内が盛り上がる。しかし、それを片岡は笑い飛ばした。

「その手には乗りませんよ、椎谷さん。まあ、そう照れないで、一度両家で食事でもしましょうや。ご両親も、きつとモエを気に入りますよ」

「本当なんです、片岡社長。僕は彼女を愛しています。その彼女を捨てて他の女性と結婚することなどできません」

「へえ、相手はどんな人ですかね。前の会社のお知り合いですか？ それともこの白岬の？」

雅臣はためらうことなく奈津子の手を握んだ。この半年の間、ずっと触れたいと願っていた手だ。ようやく自分の心に素直になれる。

そのままキョトンとする奈津子を立ち上がらせると、肩に手を回して自分のほうに引き寄せた。

「ここにいる吉岡奈津子さんです。隠していましたが、彼女が僕の恋人であり、未来の妻です」

一瞬広間の中がしんとして、すぐに大歓声が沸き起こる。次いで、皆に拍手された奈津子が言葉にならない叫びをあげた。

だから来るなど言っただ。でも、もう遅い。君も道づれにしてやるからな。

「じよ、冗談じゃないですよ、いったい何考えてるんですか！」

奈津子は怒りのあまり体の震えが止まらなかった。

この男、モエの父の迫力に負けて、頭がおかしくなったらしい。

「何が恋人ですか、何が未来の妻ですか。あたしを……あたしをなんだと思ってるんですか！」

「騒ぐな。車に乗るまで我慢しろ。文句は二人きりになってから聞いてやるから」

「椎谷さん！」

抵抗してみたが、雅臣は奈津子の肩を抱くようにして、落花の湯のロビーをずんずんと歩いていく。

先ほど拍手と歓声が渦巻く宴会場から、奈津子が飲み過ぎて気分が悪くなったという理由で退席してきた。いきなり恋人だと言われた瞬間、何が起こったか理解できなかった。片岡社長とモエの呆然とした顔。手を叩き大喜びする浩輔。涙ぐみながら雅臣の両手をしっかりと握り、この子を頼むよと言った浩輔の父。

ようやく事態を理解した奈津子が否定しようとした途端、雅臣が耳元に囁いた。

「いいか、何も言うな。黙って俺の言うことに頷いている。命令だ」

命令。そう上司の命令。縦社会の中で生きる日本のビジネスマンは、上司の命令に逆らえないのだ。

「いいから俺にベタベタくっついてろ。俺たちは恋人なんだぞ」

「ベタベタって……」

奈津子は絶句した。赤いじゅうたんが敷き詰められ、天井にはぎらぎらのシャンデリアが吊るされたロビーには、宿泊客はもちろん、掃除のオバちゃんや他の従業員もいる。ケンカしていたら、恋人宣言は嘘だとばれてしまう。混乱のあまり足元がふらついてしまったが、それを支えるように雅臣にいつそう強く抱き寄せられた。その結果、彼の体温とか腕の力強さといった男性的な魅力を急に意識して、さらに足がもつれそうになる。信じられない。こんなことをする男だったなんて。

やっと雅臣の車にたどり着くと、奈津子は押し込められるようにして助手席に乗せられた。ドアが閉められた瞬間、ようやく普段の自分に戻る。

「どうしてあんな嘘ついたんですか！ あたし、困ります。というか、これは椎谷さんとモエちゃんたちの問題でしょ？ 巻き込まないでください！」

「もう、俺一人の手に負えないんだ」

雅臣は運転席に座ったまま言い放つと、怒りをあらわにするように髪をかきあげた。

「先月の食事会のあと、いきなり娘の婿になれと言いだした。うちと片岡社長の関わり

を考えれば、無下に突つばねることもできない。それをいいことに片岡社長は仕事に何度も電話をかけてくるし、娘のほうはあの通りちよくちよくオーベルジュに顔を出す。ほとほと困ってるんだ」

「そうだったんですか……。支配人はそれを知ってたから、あたしが助けになるって言ったんですね」

近頃ご機嫌ナナメだったのは、こんな災難に巻き込まれていたからだ。少しだけ彼に同情した。

モエには二人の姉がいるが、どちらも結婚して家を出ている。だから片岡社長はモエに婿を取り、家業を継がせたいらしい。それで片っぱしから見合い相手を探しているという噂は聞いていたが、まさか雅臣に目をつけるとは思わなかった。

「俺を気の毒だと思うなら、しばらく恋人のふりをしてくれないか。俺たちが結婚を約束してると言ったら、さすがの親子も黙り込んだ」

「でもこんな嘘、すぐにはれます。だって、あたしと課長は職場ではケンカばかりだし——」

「ばれやしないさ。みんな簡単に信じ込んだじゃないか。何しろ君が、俺は優しい人だと力説してくれたからな。あの後みんなが俺たちを見る目が変わった。気付かなかったのか？」

「いいえ……。だってあたし、そんなつもりで言ったんじゃないやありません」

「でもみんなは信じた。明日からは二人の関係をオーブンにして、あの親子に見せつける。向こうが諦めて、手を引くまで嘘をつき通すんだ」

「そんなの、無茶です！」

奈津子はぶんぶんと首を左右に振る。たとえ嘘でも、こんな男の恋人役なんて耐えられない。

「無茶でも無理でも、もうやるしかない！」

いつもの厳しい口調で言う雅臣に、奈津子は両肩を掴まれシーートの背に押し付けられた。

「君は飯倉リゾートサービスの社員だ。このオーベルジュの利益を最優先に考えろ。個人の感情論はどうでもいい。もし俺がモエの婿になったら、オーベルジュを去らなきゃならない。百歩譲って残れたとしても、君は間違いなくクビにされる。片岡モエは君に嫉妬してるからな」

「嫉妬？」

モエが奈津子に写真を撮らせないのは、いつも雅臣のそばにいる自分に嫉妬しているから？

「それだけじゃない。下手すれば、オーベルジュが乗っ取られるかもしれないぞ？ あ

の親子なら金に物を言わせて、強引に買い取るぐらいやりかねない。そうすればこの旅館のようなド派手な内装に変えられるか、ラブホテルにされるかもしれない。それでもいいのか？」

「いいえ、それは……」

「だったら、恋人のふりをしろ。あいつらの前で俺たちの関係を見せつけて、諦めさせろ！」

雅臣がぐっと顔を近づけて迫る。頬や口元に彼の視線を感じて、緊張しすぎて鳥肌が立ちそうになる。

奈津子は泣きたくなかった。片岡社長のやり方も強引だが、雅臣の言い分はもっと強引だ。いや、無茶苦茶だ。オーベルジュのことも持ち出されたら断れないではないか。

「——もちろん、タダでは言わない」

ふいに雅臣の表情が和らいだ。それまで鬼のような形相でたたみかけて来たのに、急にトーンダウンした。

「もし恋人役を引き受けてくれたら、すべてが片付いた時には君を昇進させてやる。そうだ、俺と同じ課長にしてやる。そうしたら俺にあごでこき使われることもなくなるぞ。どうだ？」

「し、椎谷さんにそんな権限はないです。本社の人事が承認しなきゃ——」

「幸い本社の人事にコネがある。そちらに頼めば君の昇進なんて朝飯前だ。もし断られたら、今度は飯倉電鉄の上層部にかけ合ってやるよ」

「ほ、ほんとですか？」

「本当だ。約束する。だから恋人のふりをしてくれ、頼む。俺はまだ結婚なんてしたくないんだ」

苦渋の顔。こんな雅臣を見るのは初めてで、奈津子は少しだけ心を動かされた。

「でも、いつまで恋人のふりをするんですか？ 周りにはどう説明したら……」

「片岡親子が諦めたら、ほとぼりをさまして別れたことにすればいい。今は嘘がばれないように、君のお母さんも職場のみんなも騙すしかない」

騙す。母を欺く。周囲に嘘をつく。そんな酷いことをさせる気か、この男。でも、昇進の話は確かに魅力的だ。

「吉岡、課長になりたくないのか！ 昇進したら昇給もするんだぞ。君のあのボンコツ車を、ぴかぴかの新車に買い替えられるんだぞ！」

雅臣の怒涛の攻撃に奈津子は動悸が激しくなり、抗議ができなくなる。昇進、昇給、新車、新築。頭の中に金への執着と野心の嵐が吹き荒れ、気付けばこう口にしてた。

「なりた……です……。私、課長になりたい、です。椎谷さんの……恋人のふりをします！」

「よし、いい子だ。じゃあまず、恋人のふりの手始めとして言ってみろ。『雅臣さん』と」
 「ま、まさおみさん……」
 お母さん、天国のお父さん、ごめんなさい。奈津子は課長になりたくて、悪魔と取引しました。

心の中で両親に土下座する。そこでルームミラーを見上げた雅臣の表情が険しくなった。

「くそ、あのオヤジめ……。吉岡、俺に抱きつけ」
 「ええ？」

雅臣が起き上がり、奈津子にも見えるようにミラーの向きを変えた。暗くはつきりとは分からないが、人影が映っているような気がしなくもない。

「いいから抱きつけ。そしてキスしろ。本気でだぞ。あっちに見せつけてやるんだ」

「無理です。いきなりそんなことできません！」

奈津子は全力で拒否する。彼とキスするくらいなら、蛇やカエルとキスするほうがましなくらいだ。

「キスも契約のうちだ。昇進したくないのか！」

「それはオプショナルです！」

「つべこべ言うな。君は中途半端な仕事をするような奴なのか？」

「んもう……！」

こうなったらもうヤケだ。奈津子は体を起こして、雅臣の唇に乱暴に自分の唇を押し当てた。唇が触れた瞬間、柔らかくて温かな感触に体の奥がぞくつとなる。けれどそれを相手に悟られまいと、閉ざしたままの唇をさらに押し付け、こわごわと彼の上着の袖のあたりを手で掴む。

しかし、雅臣は唇を離すと奈津子の体を押し返してきた。

「こんな、子どもみたいなキスしかできないのか？」

その声には侮辱が込められていたが、普段の冷やかさは感じられなかった。雅臣は暗く翳った目で奈津子を射すくめたまま、力強く抱きしめてきた。奈津子は抵抗したが力で押さえつけられ、強引に口づけられる。激しく唇が吸われ、舌が差し込まれてきた。押し返そうとしても、肩も腕も力強くてびくともしない。

「か、かちよ——」

「雅臣だ。俺たちは恋人だぞ」

声をもたらした隙に、また深く口づけられた。雅臣の舌がさらに奥まで滑り込み、奈津子の舌と絡み合う。逃げようとしても無駄で、執拗で貪欲な雅臣の舌が彼女のすべてを呑み込もうとした。

体を密着させられ、口内を蹂躪され続ける。体の力が抜け、甘いしびれが全身を駆け